

街角のペンギン

路上ペンギン写真家兼物書き

高野ひろし

たかの

相棒・銀の輔と東京の街を歩くようになって、もう30年がたった。学生時代からペンギングッズのコレクターだった僕が、こいつを入手したのはさらに数年前。最初はおとなしくコレクションルームに収まっていたのだが、たまたま古い国産カメラを貰った時、試し撮りに連れてったのが運の尽き。

勝手知ったる街の片隅に、ペンギンという異物がほんやり立っている風景……。下町の路地裏や繁華街に佇む姿を、古めかしいカメラで撮るといふ行為に魅せられてしまった。両親ともに東京生まれ、上野や浅草や銀座など、子供の頃に連れていってもらった街を、今度は僕が銀の輔を案内する番だ。

の輔と出かける街だ。大雪が降ると仕事を放り出し、ダッシュで銀座に向かつてしまう。

特に小学生の頃から母親と歌舞伎見物をしてきた僕にとって、歌舞伎座には特別の感情がある。関東大震災と東京大空襲をくぐり抜けた強靱な骨格と、敬愛する建築家・吉田五十八による堂々たる衣装を



それがいつの間にか仕事になり、写真集や写真展を企画してくれる人が現れ、気が付けば30年……。僕も変わったけど、それ以上に街は激変していた。おんぼろ倉庫街だった豊洲の先に広がる草茫々の埋立地は、臨海副都心に生まれ変わった。近所の釣りおじさんと、バイクの走り屋とギャラリが集結するだだっ広い空き地に立つ銀の輔の写真は、何度見ても「ここはどこだっけ？」と自問自答してしまう。

買い物や食事、映画見物、デート、街探索……。銀座は幼少期から通い続ける馴染み深い街。人けのない正月、夏の浴衣祭り、ショーウィンドーが楽しいクリスマス、早朝から深夜まで、今でも一番多く銀

纏った破風屋根の建物は、ただ眺めているだけで幸せだった。ひとり歩きが基本の僕には、銀の輔は分身みたいなもの。僕の代わりに大好きな建物の前に立っている、至福のひとつきだった。

歌舞伎座は2013年に生まれ変わった。高層ビルを背負った、モダンな21世紀の芝居小屋になった。都市は変化し続ける、ましてや東京、しかも銀座……。変化は都心の宿命だ。若い頃は単純に「昔の風景が無くなって寂しい」としか思えなかったけど、銀の輔と歩くようになって、少しずつ思いが変わってきた。そういう時代に生まれたんだから、変化を見届けてやろうじゃないかと。

銀の輔と東京を歩き始めて、消えた風景のなんと多いことか？ でも撮りためた写真には、あの日の街角に銀の輔がちょこんと立っている。そして僕の代わりに記念撮影してくれている。何気なく訪れ、適当にシャッターを押した一枚に、膨大な情報と思いが詰まっている。まさかそんな写真になるとは、夢にも思っていなかったのに。

そして今日も僕は銀の輔と街に繰り出す。小学生時代に使ってたのと同じ、古ぼけたフィルムカメラをぶら下げて……。

時の調べ
Essay

高野ひろし

1958年、東京生まれ。街歩きをライフワークに、ルポやエッセイを雑誌等に書き続ける。また日本でも数少ないペンギングッズ専門店を、生まれ育ったJR大塚駅近くで営んでいる。



銀の輔

40年ほど前に偶然手に入れた、高さ約70cmの樹脂製のペンギンオブジェ。1990年代初頭より、銀の輔を東京の街角に置いて撮影を始め、写真集や雑誌連載、写真展などで発表している。